

連載
124

家族以外の人の呼び方の方言 その1

今回は、前回までの「教育に関する方言」とも関係の深い「人の呼び方」に関する方言を取り上げたいと思います。ただし、「人の呼び方」の中でも、本連載の27回(2000年6月)から35回(2001年2月)にかけてすでにご紹介した、家族の「祖父」「祖母」「父」「母」「兄」「姉」の呼び方、そして「男の子」「女の子」「お転婆」の呼び方の方言は除きます。

自分をさすウララ

人の呼び方の方言として、まずウララから見ることにしましょう。

ウララは北陸地方では福井県から石川県加賀地方に使われた、自分をさすと言う場合の自称代名詞の方言です。小松でも男女ともに使われた方言です。最近では共通語形ワタシの普及で、ウララを使う人はあまりいなくなりましたが、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、ウララは北陸地方以外にも、関東地方の一部から中部地

方、そして近畿・中国・四国地方の広い範囲に分布していることがわかります。

ウララというと、今では、いかにも変わった言い方と思われがちですが、もともと「おいら」から変化した「おら」の「お」が「う」に変わった形と考えられています。「うら」は、中世末期にキリスト教布教のために日本にやってきたポルトガル人宣教師たちが残したキリシタン資料(当時の京都語の様子を知る貴重な資料とされています)の一つである『日葡辞書』(1603年)に、「Vraga(ウララガ)。または、Vragaga(ウララガ)。(訳)俺が。卑しい人々が使った語」(邦訳日葡辞書)により、とあり、中世末期には京都で庶民語として自分をさす言葉として用いられていたウララ、ウララガ、福井を經由して石川にも伝わったものと考えることが出来ます。小松でもウララのほか、ウララも使われました。ウララというウララの複数形、つまり「私たち」の意味と思われるのですが必ずしもそうではなく、『日葡辞書』にもあるように、「私」一人をさしてウララが使われることもあります。この点は、福井県

の方言でも同じです。

ところで、ウララと言えば、石川県こまつ芸術劇場の愛称「うらら」を思い出す人も多いでしょう。劇場のホームページには「うらら」の名付けの理由は載っていないが、確か「私(たち)」をさす方言の「うらら」も意識した(ほかには「麗らか」の「うらら」も意識した)名付けだったように記憶しています。

余談ですが、これと同じ発想は、福井県を代表するタウン誌『月刊RALA』の名前にも見られます。このURALA(ウララ)も、「自分(たち)」をさす福井方言のウララの意味が込められていると聞いています。自分をさして使った方言ウララには特別な思い入れがあるようです。ただ、ウララをローマ字で表記して(しかもRALAとララの部分をいかにも意味ありげにRとLで書き分けているところが、日本人の外国語・外来語嗜好の姿が垣間見えて、少々気に入られません。

今回はウララ、ウララの話で終わってしまいました。家族以外の人の呼び方の方言は次回に続けます。

連載
125

家族以外の人の呼び方の方言 その2

前回は、自分(自分たち)をさすウララ(ウララ)の話で終わってしまいましたが、今回もそんな家族以外の人の呼び方の方言をご紹介します。

自称代名詞はウラ(ウララ)のほかに、女性が使うワテがあります。また対称代名詞には、目下に使うワレ(複数形はワツラ)のほか、最近ではアンタ(アンタラ)がよく使われます。

オジは「伯父・叔父」にあらず

共通語でオジと言えば親の男兄弟の総称ですが、小松を含む北陸地方では男兄弟の「弟」をさす言い方として知られています。もちろん、小松市内での「弟」の言い方にはオジ以外の方言もあり、オジボー(大杉、符津など)、オッサ・オッサマ(尾小屋、オッサボ(符津)などが聞かれました。ただし、日本語の親族呼称には、自分より年下の者を呼ぶとき(呼称)は名前で呼ぶというルールがありますので、これらは

すべて人に説明するときの言及称です。

大杉では「二番目の弟」をニバンオジ、「三番目の弟」をサンバンオジとも言ったよつです。「下の弟」をチサボーとも言いました。

では、「弟」をオジのように言うとしたら、本来の「伯父・叔父」のことはどう言うたのでしょうか。両方ともオジと言って同音衝突を起こしていたのかというと、そうではないようです。例えば、大杉ではオッサマ(伯父・叔父)対オジ・オジボー(弟)のような区別が聞かれました。尾小屋ではオッチャン・オッサン対オッサ・オッサマ、符津ではオッチャン・オジサン対オッサ・オッサボ、オジボー、安宅ではオジサン対オッサ・オッサボのような区別が聞かれました。

一方、「伯母・叔母」の呼称・言及称は、オバサン、オバチャン、オバサ(大杉)などです。

コッパオジは男兄弟の末っ子

性別に関係のない「末っ子」の総称(言

及称)はオトコです。

それに対して「男兄弟の末っ子」の言及称には、コッパオジ(大杉、尾小屋、龍助町)、コッパ(尾小屋、龍助町)、オトンボ(安宅)などが聞かれました。中でも、コッパオジ・コッパは卑称的で、コッパとは「木っ端」のことですから、人間扱いされていないかのようにかわいそうな気がします。

「孫」「曾孫」「玄孫」などの言及称は?

小松では「孫」はほとんど「まご」です。それに対して「曾孫」はヒコです。ヒコとは、もともと「曾孫」の雅語であったヒヒコからの変化形と言われます。「玄孫」のことは、大杉でマタゴ、尾小屋でシャヤヤ、符津でチャヤヤゴという言い方を聞きました。

「実子」はワガコ(我が子)、「養子」はモライゴ(貰い子)、ヤシナイゴ(養い子)です。逆に養子から見た「義理の親」のことは、ヤシナイオヤ(大杉)と言います。「継父」はママチチ、「継母」はママハハです。

連載 126 家族以外の人の呼び方の方言 その3

前回、前々回に続いて今回も家族の「祖父」「祖母」「父」「母」「兄」「姉」を除く、人の呼び方の方言を取り上げたいと思いますが、その前に前々回取り上げたウラ(自分をさす言い方に)関連した話題から始めます。

大杉のゲアは白山麓の白峰方言につながる?

前々回に「自分」のことをさすウラ(複数形はウラニ)を取り上げたときに合わせてご紹介すべきでしたが、小松市内でも東部山間地の大杉で、女性が主に使ったという自称代名詞のゲア(ゲア、ギャー、ゲーなどの発音も)という珍しい形を聞きました。

その由来等についてはつきりは分かかっていませんが、周囲の方言とは異なる特徴を多く持つことから、専門家の間で石川県の「言語島」(言語の島)ともして知られる、白山麓の白峰方言の自称代名詞ギフ、そしてギラからの音声変化形として40歳代以下の若い男性に使用が見られるギャー

に酷似している点が注目されます。このことはその歴史的・地理的条件から、大杉、そしてさらに奥の旧新丸村(丸山・花立・新保)が、峠越えで白峰との交渉があったらしいことと関係があるかもしれません。

「婿」と「嫁」、その他

小松市内では、「婿」のことはムコサン、「嫁」のことはヨメサンという言い方が一般的です。それぞれのことを話題にして話すときに使われる言及称です。ムコサン、ヨメサン以外では、尾小屋でムコサ、大杉でヨメサという言い方も聞かれました。龍助町や安宅町ではムコドンも聞きました。龍助町では、ムコドンが一般的言い方で、ムコがそれよりもぞんざいな言い方、ムコサは逆にそれよりも丁寧な言い方とのことでした。

「夫婦」のことはシヨートという言い方が一般的で、妻が夫をさして言う言及称には、「父親」に対するトート、ツーツなど、の呼称・言及称のほか、ダンナン、ダンナ、ウチノヒトなど、逆に、夫が妻をさして言う言及称には、「母親」に対するカーカ、

オッカーなどの呼称・言及称のほか、ヨメ、そしてジャーマ(大杉ではジャーマは使わないとのことでしたが)などが聞かれました。結婚しない「独身」の人のことは、ヒトリモン、ヒトリミです。

婿や嫁の立場から言う「舅」はオトコジユート、「姑」はオンナジユートと言ったようです。「養父母」のことはギリノオヤ、ヤシナイオヤです。

「夫をなくした女性」は、コケサン(尾小屋ではコケサとも)、コケで、「妻をなくした男性」はヤモメですが、符津ではヤマメとも言ったようです。「やもめ」は本来、配偶者をなくした男女のどちらもさしましたが、「妻をなくした男をさすのが普通で、符津のヤマメはヤモメの音変化形です。

アトソイは「再婚相手」のことです。「継母」はマママハハ、「継父」はマママチチと言います。そのどちらもさしてママオヤという言い方もしたようです。ママコは「継母」から見た子どもをさします。

以上、へ人の呼び方に関する方言を三回にわたって見てきました。今回は別のテーマにします。

連載 127 道具に関する方言 その1

今年も早10月を迎えました。秋といえど台風が多い時期だったはずですが、これも異常気象のせいか、最近では北陸を襲う台風がめつきり少なくなりました。そんな中で、田を黄金色に染めていた稲の刈り入れも早場米地帯の北陸では、ほぼ終わりを迎えます。

昨年4月から8月にかけて5回にわたって、農業に関する方言をご紹介しましたが、今回は道具の中でも、農業と関連した道具類から取り上げてみたいと思います。

オドシとは恐喝のごとくではなく、案山子のゴウ

文部省唱歌に「♪山田の中の一木足の かかし 天気の良いのに みの笠つけて …♪」と歌われた秋の風物詩「かかし」のことをオドシと言いました。「かかし」をさすオドシは、小松をはじめとする北陸地方の広い範囲で聞かれます。オドシと

言えば、今では「恐喝」のことをさす思い浮かべますが、実った田の稲をついばみにくる雀などの鳥をおどすのでオドシと言ったわけですが、オドシは「かかし」に限らず、鳥をおどすための道具全般をさして使われた言葉です(筆者も福井の農家で育ちましたが、子どもころ見た、田に張り巡らしたキラキラ光るテープのようなものもオドシと言っていました)。

トミは「唐箕」

トミ(トミト)と発音される場合もというのは、豆や粉、麦などの穀物を上から入れて、風を起す羽板を手で回して回転させ、その風で軽い殻を飛ばして、実と殻を選り分けるための農具です。以前はこの農家にもあったものですが、最近ではめったにお目にかかれなくなりました。

もともと「唐箕」の字が当てられ、小松に限らず全国でこう呼ばれたので方言と言ったべきではないようにも思いますが、その道具自体がほとんど使われなくなつて、共通語の世界でも一般の人の理解

語からは消えつつあり、農村部を中心にかるうじて理解され、使用されているという点で、方言に近い存在になっているように思いましたので、取り上げてみました。

トミではなく、普通の箕(穀物を中に入れ、上下に振り動かし勢いで塵・殻などを飛ばすようにして取り除く道具)で塵・殻などを取り除くことをアオツと言ったようです。それに対して、トミを使つてアオツことは、トミアオチと言ったそうです。市内南部の符津で聞いた言葉です。

収穫した野菜などを入れたテゴ

最近では使う人もめつきり少なくなりましたが、以前は農家ですと大抵の家にテゴと呼ばれる入れ物がありました。テゴとは口が丸い形の藁製の入れ物で、肩からかけて使いました。筆者も子どもの頃は、畑で収穫した野菜を入れたり、春の山菜採り(ぜんまいや藤採り)などでよく使ったものです。

〈道具に関する方言〉は次回に続けます。

連載 128 道具に関する方言 その2

今回も主に農業と関連した道具類の方言を取り上げます。

鎌の種類と方言

草刈り用の小型のクサカリガマに対して、木の枝などを切るための刃の厚い大型の鎌を符津でキガマ、大杉・尾小屋でネカリガマ、大杉でシタカリガマなどと言ったようです。それぞれ「木鎌」、「根刈り鎌」、「下刈り鎌」の意味でしょう。

稲刈り用の、刃が鋸のようになった鎌は、場所によってイネカリガマ(「稲刈り鎌」の意)、ターカリガマ(「田刈り鎌」の意)、ノギリガマ(「鋸鎌」の意)などと言ったようです。ちなみに、「鋸」のことはガンド、ガンドーなどと言います。

鋸の種類と方言

鋸の種類としては、田の畦塗りに使うヨツグワ、ヨツグワ(鋸の刃先が四つに分かれたもの)、畦塗りの仕上げに使う

ゼヌリグワ、土起し用の刃先が三つに分かれたミツグワなどがあります。

鋸と関連しては、マクワ、クソクワという面白い言い方を符津で聞きました。マクワとは、右利きの人が左手を手前にして鋸を持つことを言い、逆に、右利きの人が右手を手前にして鋸を持つことをクソクワと言ったことでした。

「熊手」の方言ビブラの語源は不明

「熊手」とは長い柄の先に熊の手のような先の曲がった鉄の爪をつけた道具のことです。同じような形で竹製のものもあり、落ち葉などを掻き集めるのに使われる道具です。今でも屋外の掃除に使われることが多いので、「熊手(クマデ)」の名前を知っている人は多いでしょうが、一方で、ビブラという方言を知らない人が確実に増えています。「熊手」の方言ビブラは、その発音が変化した形を含め、福井・石川・富山の北陸三県と新潟県にその分布が見られました。ビブラに似て、田の土をならすための鉄製の熊手状の農具を符津などではカクサキと言ったようです。

「石臼」「篩」などの方言

「石臼」のことはヒキウスと言いますが、そのヒキウスで挽いたものを粉と皮に分けるときに使う、最も目の細かな篩をスイノと言いました。スイノと逆で、目の粗い篩をトーシカゴ、米用の篩をケンドンと言ったことでした。

「糞を打つ槌」のことはワラカチキネ、ワラカチです。ここでのカチは、「うつ、殴る」の意味の動詞カツの連用形にあたるものです。

「肥料にする糞尿を運ぶための(肥桶)は、タゴケ、タモケ、コヤシオケなどと呼ばれました。

「背負って物を運ぶための木製の道具」には、大杉でセータ(「背板」から)、尾小屋でセナカチ(「背中当て」から)、符津で「ドラ」などの名を、また大杉では、物を背負うときに、主に男性が使った藁製の厚い背中当てのカンザ、主に女性が使った薄い背中当てのコモの名を聞きました。

〈道具に関する方言〉は今回で終わります。

連載 129 勤勉に関する方言

いよいよ今年も師走を迎えました。今年最後の回(の勤勉)というテーマは一見難しそうに思われるかもしれませんが、わかりやすく言えば(の勤勉)とは「所懸命(所懸命)と怠けること」ということで、それらに関する方言を取り上げてみます。

「励む」と「関連する方言」

一所懸命(所懸命)仕事に励む(励む)ような真面目な人(人)のことを、マメ(マメ)人と言います。マメ(マメ)はまた、「マメ(マメ)にする(マメにする)のような言い方で、頻りに」といった意味でも使われます。

大杉で聞いた表現に、「手が(よく)動く」にあたるテガイノク(テガイノク)があり、共通語で言う「まめな(まめな)ことを表します。同じく大杉で、「仕事が早い、人より多く仕事をすること」をさすというテガツシヨナ(テガツシヨナ)という言い方も聞きました。テガツシヨナについては、粟津方面で同様の意味のテゴシヤナ(テゴシヤナ)「手(が)巧者(な)に由来する(な)」

という言い方があるとの情報を得ましたので、テゴシヤナ(テゴシヤナ)がテゴツシヤナ(テゴツシヨナ)のような形を経て変化したものと考えられます。

リキム(リキム)は「力を入れる」の意味もありますが、転じて「頑張る」の意味が生じて、リキンデ(リキンデ)スル(スル)「頑張っている(スル)」のようにも使われます。

シヨワシナイ(シヨワシナイ)は「せわしない」の発音が変化した形で「忙しい」の意味になります。が、似た意味で大杉ではアツシエ(アツシエ)尾小屋でアシエ(アシエ)ゴシエ(ゴシエ)という珍しい言い方が聞かれました。アツシエ(アツシエ)ゴシエ(ゴシエ)の「アツシエ」は「アツシエ」の「アツシエ」の「アツシエ」に通じる形がもしもありません。

一所懸命(所懸命)仕事に励む(励む)ためには健康で、丈夫であることが大切です。そんな「元気な、体が丈夫な」といった意味で、ソクサイ(ソクサイ)が使われます。「元気で健康な」様子を表す方言のソクサイ(ソクサイ)は、小松に限らず、石川県内の広い範囲で今も方言として使われています。ソクサイ(ソクサイ)は、「無事」の意味の漢語「息災」に由来します。かつての中央語であり、現代共通語でも使われ

なくはありませんが、共通語では極めて限られた場面での使用となっています。

「怠ける」と「関連する方言」

一方、「怠ける」をさす言い方として、符津でシエナハゲ(シエナハゲ)という言い方を聞きました。が、語源は不明です。

「酒ばかり飲んで怠けている人」はドンダクレ(ドンダクレ)です。ドンダクレは「飲んだくれ」の最初の「の」の「」有声歯茎鼻音)が、発音の仕方の似ている「ど」の「」(有声歯茎破裂音)に変化した形です。尾小屋では、「怠ける」のことをドンダクモン(ドンダクモン)「どくもん(道楽者)」からの変化)とも言うたそうです。

ドンダクレに似た言い方では、尾小屋でドンダフル(ドンダフル)という動詞を聞きました。ドンダフル(ドンダフル)というのは「仕事をしないで遊んでいる」ことをさす言い方だそうで、ドンダフツテヤナ(ドンダフツテヤナ)「仕事をしないで遊んでいて嫌だね」のように言うことでした。「横着な人」はオーチャクモン(オーチャクモン)です。

連載
130

難易に関する方言

あけましておめでとございませう。本連載がスタートした98年4月から数えて足かけ12年目の年を迎えました。今後も引き続き、小松のさまざまな方言をご紹介していきたいと思っておりますので、ご愛読ください。

さて、アメリカのサブプライムローンに端を発した金融危機は日本経済にも大きな影響を与え、自動車業界の大量リストラ、就職内定学生の内定取り消しなど、多くの深刻な社会問題を抱えながらの難しい年越しとなりました。そんなわけで、今回は「難しい」こと、そしてその反対の「易しい」ことに関する方言を取り上げることになります。

ムツカシーとラクヤ、ラクナ

「難しい」は少し発音が変わってムツカシーと言います。例えば、ムツカシーヒトヤ(難しい人だ)のように使われます。逆に「易しい」ことはラクヤ、ラクナー(「楽や・楽な」)のように言います。

ジャマナイは気づかれない方言の二

筆者が金沢に来て間もないころの話です。ある銀行のキャッシュコーナーで操作に手間取っていたら、そばにいた係の男性に「ジャマナイカ?」と言われて、一瞬戸惑ったことを覚えています。まだ金沢の方言に慣れていなかったの、なぜ「邪魔じゃないか?」と言われるのかと不思議に思ったのです。

小松の方言でも使われるこのジャマナイが「大丈夫」の意味だということは間もなく知りましたが、銀行の係の人が初対面の筆者に「ジャマナイカ?」と語りかけたのは、その人が「大丈夫」の意味のジャマナイを方言だと気づいていなかったどころでも通じる言葉だと思っていたせいだろうと思えます。共通語でも「邪魔」「邪魔じゃない」といった言い方をするので、「大丈夫」の意味のジャマナイも共通語だと思っている人が少なくないのです。方言研究者は、このようなものを「気づかれない方言」「気づかない方言」などと呼んで注目しています。方言だと気づかれない

くいせいで、若い世代にも受け継がれ、使われ続けているケースが多いからです。

「苦しく困難な目にあう」の意味のナンギスル、「困難な」の意味のナンギナのナンギは、いずれも「難儀」で、共通語の話しことばではめったに使われませんが、小松ではまだ方言として生きています。

アバヨの語源は「塩梅良う」

「調子、具合」のことをアンバイと言います。アンバイガ、フルイで「体の具合が悪い」といった意味にもなります。アンバイは「塩梅(えんばい)」と「按排(あんぱい)」の混合した語と言われています。

小松の方言ということではありませんが、「さようなら」の意味の俗語的表現として使われることのあるアバヨは、別れのあいさつとして用いられたアンバイヨ(具合よく)の短縮形なのです。

「何かが不足していて困る」ことを、フンジョナと言いました。フンジョナは「不自由な」の発音が変化した形です。

今回は、経済に関する方言を取り上げます。

連載
131
その1

経済に関する方言

世界的な経済不況の嵐の中で2009年がスタートしてはや1か月。そんな世相に合わせるわけではありませんが、今回は「経済」に関する方言、つまりお金にからむ方言を取り上げます。

コー(買う)は中央語(京都語)の古い姿

筆者の出身地福井県ではまず聞かれないのですが、小松を含む石川県の多くの方言では、学校文法で言うところのアワ行(古典文法で言うハ行)五段動詞の基本形(終止形)がアロー(洗う)、モロー(買う)のような形になります。したがって、お金を出して「買つて」という場合もコーとなります。

これらの、アロー、モロー、コーなどの発音は、かつての中央語である京都語の歴史で言えば、中世の時代に起こった古い発音の変化が方言に残った例です。少し専門的な話になりますが、「洗う」にあたるアロー、「買う」にあたるコーなどの発音がどのようにして生じたかを説明し

まじょう。

「買う」を例にすれば、古くは八行四段動詞で基本形が「買ふ」だったものが、平安時代の11世紀ころに一般化したとされる「八行転呼音」という現象(語中・語尾の八行音がワ行音に変化する現象)によって「買う」になり、さらに「買う」[kau]に含まれるアウ[ɔ]連母音が中世に入って長音化してコーと発音されるようになったものです。西日本地域で共通語の「買つて」にあたる方言形がウ音便形と呼ばれるコーテになる(買ひて→買ういて→買つて)→コーテ)のも同じような音声変化の結果です。

西日本地域では、その後、音便形コーテ以外の基本形は文字表記に引かれて再びコーからカウに戻った地域が多いのですが、小松などの石川県内では古いコーの形を今に残しているというわけです。基本形がコーであるために、小松方言などでは活用語幹がコで統一され、打ち消し形「買わない」にあたる形も伝統的方言ではコワン(西日本方言の一般的な形はカワン)となります。

「お金の意味のジエンは「銭」から

ものをコー(買つ)するためにはお金が必要ですが、「お金」のことは小松の方言でカネとかジエンと言います。ジエンは言うまでもなく「銭(せん)」の最後の母音「ん」が脱落した形です。また、ジエンのように、現在のゼにあたる発音がジエとなる(セもシエとなる)のも、中世末ころまで中央語(京都語)の標準的発音とされたものの残存です。ジエン、ハロー(お金を払う)、デコト、ジエンガ、カカル(たくさんお金がかかる)のように使われます。

そのジエンを数える、計算することはサンニヨスルと言います。サンニヨは「算用が変化した形」です。関連して、「利害の打算をする」ことをソロバンスルと言つようです。ものの値段のことは、ネタン以外にただネ(値)とも言います。ネの方が古い形です。

「お金持ち」「資産家」のことは、ジエンモチ(銭持ち)の意、オヤケ(大きな家)の意の「大宅(おほやけ)」から、ダンシヨ(檀那衆)からなどと言います。「財産」のことはシンドアイ(身代)からです。

連載 132 経済に関する方言 その2



ゾーヨがかかっている分、華やかですね。(今年の成人式会場から)

今回も前回に続いて(経済)に関する方言を取り上げます。

「費用」の意味の「ゾーヨ」は「雑用」から

あることにかかるお金、「費用」のことを「ゾーヨ」と言います。例えば、ゾーヨカカル(お金がかかる)の意のように言います。

「費用」のことを「ゾーヨ」と言うのは、小

松を含んだ北陸三県に、新潟、岐阜、そして近畿、中国・四国・九州北部地方などの西日本の広い範囲に及びます。これらの地域では、ゾーヨ以外に「ゾーヨ」と最後を伸ばす形も聞かれることがあります。が、これはもともと「雑用」(歴史的仮名遣いでは「ぞふよう」という漢語に由来するもので、「ゾーヨ」の形は、中世末期の京都語を記録した『日葡辞書』(1603)などにも載っています。従って、小松の「ゾーヨ」は「ゾーヨ」から変化した新しい形ということになります。

「マンゾー、マンゾ」は「万雑」から

費用と言えば、「ゾーヨ」と関連の深い方言に「マンゾー(マンゾとも)があります。マンゾーとは、村の共通経費を分担して納めること、その分担金のことを言います。一般にお盆と年末の年2回徴収されます。

マンゾーには「万雑」の漢字が当てられ、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の「まんぞう(万雑)」の項によれば、「①『まんぞうくじ』(万雑公事)」の略。②江戸時

代の北陸地方で、「一般の課役(かやく)や村入用(むらいよう)(村費)をいう」とあり、富山県、石川県、鹿島郡・羽咋郡、岐阜県大野郡の方言資料の存在が記されています。この記述から考えると、「平安中期以来、公領・荘園の土地に賦課(ふか)されるようになった雑役(夫役)・雑物(現物納)。また、転じてその賦課権」(『日本国語大辞典 第二版』の「まんぞうくじ」の説明より)のことを言う「万雑公事」が中央から伝わり、北陸地方で語が略されるとともに、地方の生活の中で意味を変えた可能性があります。あるいは、先の「雑用」の語が中央から伝わった後、「万」の雑用の意味で北陸地方で「万雑」という言い方が生まれた可能性もあるかもしれません。

「算盤がツエー」ってどんな意味?

お金に関する慣用語として、大杉でソロバンガ ツエー(算盤が強い)というのを聞きました。「お金の使い方が上手だ」という意味です。

次回も(経済)に関する方言です。

連載 133 経済に関する方言 その3



大事なシンガイゼン、家のどこに隠す?

いよいよ今月から本連載は12年目に入ります。連載が始まった平成10年に生まれた赤ちゃんが4月からはもう小学校5年生になるわけですから、つくづく時の速さを感じます。気持ち新たに12年目をスタートしたいと思いますので、引き続きご愛読下さい。

今回も前回、前々回に続いて(経済)に関する方言を取り上げます。

シンガイゼンとはどんなお金?

シンガイゼン(シンガイゼンの発音も)と聞けば、何かお金のことだろうとは想像できても、正確な意味が分かる人は少ないでしょう。小松の方言でシンガイゼンとは「へそくり」のことを言います。語の後半部のゼンは「銭」の古い発音「エニ」がゼニとなり、最後の「ニ」が「ン」に変わったものです。

では、シンガイとは何でしょうか。初めてこの語を聞いたとき筆者は、シンガイとは「心外」つまり、人に隠れてこっそりと貯めたお金ですから、周囲の人からすれば「意外なことをされて裏切られたような気になる」つまり「心外な金」という意味だろうと思ったことを今でも覚えています。しかし、調べてみると、シンガイゼンのシンガイとは「新開」(新開)に由来することがわかりました。

江戸時代、農民がひそかに開墾したたんぼ(隠し田)は登録されず、そのため年貢米を納める必要がありませんでした。そのような隠し田のことを「新たに開墾

したたんぼ」の意味で「新開田」と呼び、隠語のように使われたところから「隠し事をする意味の」しんがいがする」という言葉が生まれたようです。そして、さらに「しんがいが(隠し子)」「しんがいで(へそくり)」などという語も生まれたと考えることが出来ます。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「へそくり」のことを小松と同じように、シンガイゼン、シンガイゼン、その下略形シンガイのように言うのは、長野、新潟、富山、石川、福井そして岐阜、奈良、島根、山口などの広い範囲に及びます。

「もったいない」はアッタラヤ

お金にもからむことですが、「もったいない」という意味を表す方言にアッタラヤというのがあります。このアッタラヤは、「惜しくも」の意味の古語「あたら(可憐)」を形容動詞化したものと考えてよいでしょう。

今回(経済)に関する方言は終わります。

連載 134 地理・地形に関する方言 その1



鉱山跡のマンポ(トンネル)

本連載で取り上げている小松の方言のデータの多くは、これまでも何度か書いていたように、筆者が小松市立博物館方言調査委員会の委託を受けて1996年から5年計画で実施した市内全域の調査で得られたものです。5年間、夏休みを利用して金沢大学の学生とともに調査で市内各地を動き回りながら思ったことは、安宅などの沿岸地域から小松バイパ

ス沿いの平野部、そして中ノ峠、大杉、尾小屋などの東部山間地まで、小松は実に多彩な地理・地形に出会える市だということでした。という訳で今回からは「地理・地形」に関する方言を取り上げます。

「トンネル」を指す方言マンポ、マンブ

小松の皆さんでマンポ、マンブという方言を聞いて「トンネル」の意味だとわかる人はどれくらいいるでしょうか。50歳代以上の人でギリギリ使っていた、聞いたことがあるといったところでしょうか。それほど忘れられかけているマンポ、マンブですが、小松のように「トンネル」をマンポ、マンブのように言った地域は意外に広く、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、マンポが石川県江沼郡、福井県、滋賀県栗太郡、マンブが福井県、京都府竹野郡、そしてこれらに似たマンポが富山県砺波、福井県遠敷郡、マンブが山形県最上郡・西田川郡、新潟県岩船郡・中頸城郡、静岡県、愛知県北設楽郡、三重県、滋賀県彦根、京都府、マンブが山形県、奈良県生駒郡、島根県出雲、マンポが富山県東

礪波郡、長野県東筑摩郡、静岡県、愛知県豊橋市、三重県飯南郡、滋賀県蒲生郡、京都府、奈良県吉野郡で使われていたことがわかります。福井県越前市(旧武生市)生まれの筆者も小さいころはマンブと言っていました。

「トンネル」を指すマンポ、マンブ及びそれに似た言い方の語源は、漢字で「間府、間歩、間分」などと書く「まぶ」だと考えられます。2007年にユネスコの世界遺産に認定された島根県大田市の石見銀山が話題になり、かつての鉱坑がテレビに登場したとき、「龍源寺間歩」のように「間歩」と呼ばれていたのを覚えていた人もいるでしょう。この鉱山の鉱坑を指した「まぶ」がその後、道路や鉄道に作られたトンネルも指すようになり、方言として発音を変えてマンポやマンブなどと呼ばれるようになったわけです。

連載 135 地理・地形に関する方言 その2



「ツツミ」は、もともと田の用水確保のために作られたものですが、プールの無い時代は、子どもたちの貴重な泳ぎ場所でもあった。(写真は昭和30年ころ)

前回は「トンネル」の意味の方言マンポ・マンブを取り上げましたが、今回もそれに続けて「地理・地形」に関する小松の方言を見ていきます。

「ため池」を指すツツミ、ツツミも方言

「灌漑用(かんがいよう)に水をためた池(いけ)つまり「ため池」のことをツツミ、ツツミと言います。ただ、人工的なため池だけでなく、自然

に水がたまった池のことも言うようです。ツツミがもともとの言い方で、ツツミはその変化形として生まれた形です。ここまで読んで「えーっ、ツツミって方言なの?」と思う人もいるでしょう。確かに『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「用水池。ため池」をツツミと言う地域は、小松などの石川県をはじめとする北陸三県のほか、北は青森県から南は九州の大分・熊本県までの広い範囲に及んでいることがわかります。したがって、「ため池」の方言ツツミは、少なくとも現代共通語では「ため池」をツツミとは言いません。んから、方言とは言いがくても、特に中年層から高齢層にかけては、東北から九州までの非常に広い範囲で通用した方言ということになりま

す。ツツミと言えば「堤」という漢字があてられるように、「土手。堤防」を指すツツミの存在も考えなくてはいけません。が、文献上では「土手。堤防」の意のツツミは、『万葉集』(巻14・三四九二)にすでに使用例が見られますから、東国語としてのツツミは(巻14は当時の東国出身者の歌を

集めたとされる「東歌」の巻です)相当高い可能性があります。それに対して「ため池」を指すツツミも、平安時代にはかつての中央語(京都語)としての使用例が確認できますので、小松での「ため池」の方言ツツミも、そうした古語の名残であることは間違いないと

ほかの地形関連の方言から

「平らな土地」のことをヒラチと言います。言つまでもなく「平地」の意味です。へーちとも言います。ヒラチに対する「山」は「山」の中でも岩でできた山、「岩山」のことをイシヤマ、イシヤマのように言います。イシヤマは言うまでもなく「石山」からで、イシヤマはそれからの変化形です。

「清水」の字があてられるシヨースは、「湧き水」を指すとともに、「湧き水が出る場所」をさしても使われます。

連載
136

地理・地形に関する方言
その3



「サワ」から連想されるもの一つには滝がある。写真は小松で1、2と言われている「西侯大滝」。

今回も「地理・地形」に関する方言を取り上げます。前回に続けて「地形」関連の方言から、今回は「サワ」という言い方について考えてみることにします。

サワは東日本と西日本で指すものが異なる

サワ(沢)という言い方は、実は長野県と岐阜県を分ける北アルプスを境に、東

日本では、北陸も含む西日本で言う「タニ(谷)にあたる言い方として使われていることをご存じでしょうか。つまり、日本国内では、山地にある谷状の地形を表す地名の代表的なものとしてサワとタニの2通りの方言対立があるということなのです。

ところで、小松でサワと言つた、タニにある水の流れる場所、湿地を指すのが普通です。福井県の方言でも同じでしたから、筆者もかつては、東日本で聞く「沢」という地名、例えば長野県の有名な観光地である上高地から穂高連峰に向かう途中にある涸沢などの「沢」は、そこに水が流れているからそのように呼ばれるのだと思っていました。しかし、本来はそうではなく、「涸沢」の沢は西日本で言う「谷」の意味の「沢」だったのです。

しかし一方で、国語辞典には、「谷」は「両側が台地や山にはさまれて低くくぼんだ地形の、細長い一続きの土地」、「沢」は「くぼんでいて、草の生えている湿地。山間の、源流に近い谷川」(『新明解国語辞典 第六版』三省堂)などのように記述され、

現代共通語としては、むしろ小松方言での使い分けに似た意味であることがわかります。このことは、かつての中央語(京都語)での「谷」と「沢」の意味が江戸時代中期以降に江戸に伝わって、明治時代以降それが標準的意味になったことを示すもので、それ以前の東日本地域での「谷」を指すサワ(沢)という言い方は、地名の中にしつかり残ったのだと考えられそうです。

かつての江戸語(関東方言)が明治時代以降に共通語標準語となったものが多く中で、西日本方言である「魚の鱗」のウロコ、「明後後日」のシアサツが局地的に江戸(東京)に伝わって普及し、本来の江戸語(関東方言)のコケラ鱗やヤナアサツテ(明後日)を押しつけて共通語になったのと似たケースと言えます。

サワも前回のツツミ同様、小松だけでなく全国の広い範囲で使われる方言の例でしたが、今回は、語形が同じでも意味に東西対立がある例(小松は西的)としてご紹介しました。

連載
137

地理・地形に関する方言
その4



安宅のウミベリでは、たくさんウミネコの姿を見ることができます。

前号ではタニ・サワとの関係で、夏にふさわしい、涼しげな滝の写真を載せましたが、暑い8月の「地理・地形」に関する方言ということで、海に関する方言から見てみることにします。

海に関する方言あれこれ

「海」は最近ではウミとしか言わなくなりつつありますが、伝統的な小松方言で

は、ウミのように、ウの後が伸びて発音されたものです。この発音の特徴は、以前にも触れたことがあります。旧能美郡地域の方言(能美郡ことば)の代表的な特徴の一つで、ウミと同じように「沖」もオキと言います。「牛」をウーシ、「靴」をクーツと発音するのも同じ特徴ですが、最近では高年齢の人からもあまり聞かれなくなっています。

海(「地理・地形」関係の方言)には、「海岸」を指すウミベリ、「海岸の入り江で船が入ってくる場所」を指すフナミチ(「船道」の意)、「砂浜」を指すハマ、「海の近くの集落や砂浜」を指すハマドコロ、海の中の「暗礁」を指すノリアゲ(「乗り上げ」の意)、「浮いているように見える島」を指すウキジマなどがあります。

「地理・地形」というわけではありませんが、「海」に関する方言に「波」を指すノタがあります。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「波、波のうねり」を指す方言のノタは、北の青森県(旧南部藩域)から山形県庄内地方、そして新潟県、富山県、石川県、福井県、そして少し離れた島

根県(八束郡、隠岐島)に分布し、ノタの変化形と思われるネタが山口県阿武郡に分布しています。この分布から、北陸で使われたノタが北前船ルート(海上伝播)で新潟、山形(庄内)、青森へと日本海側を北上した可能性が高いと考えられます。

川などに関する方言あれこれ

カワは、一般的な「川」のほか、「田畑に水を引く用水」も指して使われます。「川の淵」のことは、フチのほか、岸側の淵を指すカワブチ(「川淵」の意)やカワノアゲという言い方が聞かれました。「沼地」は又カルミとかヌカと言ったようです。

ところで、前々号で「ため池」を指すツツミを取り上げましたが、それとの関連で、安宅町で「ため池」を指すタナケという方言が聞かれたことを紹介しておきます。

連載
138

形容語の方言あれこれ その1



「お陰さんでソクサイやし、毎日歌で楽しんでるわいね」(市民センターのカラオケ教室にて)

今回からは「形容語」(学校文法で言う「形容詞」「形容動詞」)の方言を取り上げることになります。

「形容語」の方言については、本連載でもすでにいろいろなものを取り上げていますが、今回からは、これまでにまだ紹介したことのない「形容語」を中心に取上げていきたいと思っています。全国的に方言の共通語化が進む中でも、「形容語」の方

言には共通語にびったり置き換えられないものも多いため、比較的伝統的方言が使われ続けていることがあります。

健康状態に関する形容語

「元氣な」ことをソクサイナと言います。ソクサイは漢語の「息災」(本来は仏教用語で「災難を防ぐこと」を表し、一般的には「無事なことを意味します」)に由来する語です。現代共通語から完全に消えてしまった言葉ではありませんが、現在「息災な」と言えば、ずいぶん古めかしい日本語という印象を与えるに違いありません。そんなソクサイナが、小松をはじめ石川県内の方言では、今も高年齢層を中心に比較的良好に使われているのです。大杉町ではソクサイナの形も聞かれました。似た意味でタツシヤナ(「達者な」)からも聞かれます。

「元氣な」の反対で「病気で体調が悪い」「つらい」などの意味を表す小松の方言には、ヒドイ、モノイ、タイソナなどがあります。珍しいところで、尾小屋で「コワイ」という言い方も聞きました。

「体調が悪い」ことを言う「ヒドイ」は金沢あたりでもよく使われ、加賀地方の人は「体調が悪い」意のヒドイも共通語だと思っている場合が少なくありません。こういう方言を専門家は「気付かない方言」とか「気付かれにくい方言」などと呼んでいます。他地域の人には誤解されやすい方言ですから気を付けましょう。

モノイは古語「物憂い」に由来する方言です。モノウイの「ウ」が脱落した形です。タイソナは「大層な」が意味と形を変えたものでしょう。

尾小屋で聞いた「コワイ」は、「つらい」「疲れた」といった意味で北関東から東北、北海道にかけての広い範囲に分布する「コワイ」に通じるもので、ほかに紀伊半島南端や中国、四国、九州の一部にも分布することから、「固い」「恐ろしい」の意味の「コワイ」とは異なる、「コワイ」の古い意味の残存の可能性があります。

連載
139

形容語の方言あれこれ その2



寒い季節になると、ヌクイ食べ物が増えます。「肉まん大好き〜!」(竹田知起くん、真彰ちゃん)

今回も形容語の方言を引き続き取り上げます。

今年の夏は梅雨明けも遅く、例年のような夏の本格的な暑さを体験しないうまま、涼しい秋になってしまった感があります。と、いつわけて今回は、暑さ・寒さなど、気温(温度)に関する形容語の方言から見ていきます。

気温(温度)に関する形容語の方言

「暑い・熱い」は小松でもアツイ(「大変暑い・熱い」ことはテンボナ アツイ)ですが、「暖かい」にあたる言い方はヌクイが使われます。ヌクイは小松だけでなく石川県の広い範囲と富山県の一部でも聞かれます。南の福井県ではノクトイ、ノクテアが使われます(福井ではノクトイ、ノクテアは「頭があたたかい」の意味でアホ・バカの意味で使われることもあります)。ヌクイの関連語として、「生暖かい、生温かい」の意味のナマヌルイ、ヘナマヌルイも聞きました。

「蒸し暑い」は一般的にムシアツイですが、尾小屋ではムシヌクイという言い方も聞かれました。

「暑い」の反対の「寒い」は、サムイのほかにはサブイが聞かれます。サブイの方が方言としては古い言い方です。関連して「寒がりの人」をサムサガリとかサムガリヤと言います。

「熱い」の反対の「冷たい」は、チビタイ、チツタイ、チツターなどです。

臭い(臭)の一種のネグサイとは

梅雨時や夏など、ヌクイ、ムシヌクイ季節になると、食べ物が増えやすくなります。そのようなものが腐ったような悪臭をネグサイと言います。

カイイとエテの意味は?

暑くて汗をかいたりすると体が痒くなったりしますが、「痒い」をカイイあるいはカイイと言います。カユイのユイが融合してカイイ、さらにその短縮形でカイイになったものか、カユイのユイが落ちてカイイ、そして最後に伸びてカイイとなったものでしょう。

エテは「痛い」の意味の方言です。イタイがエタイ、さらにエタイがエテと変化した形でしょう。「痛い」がエテと発音されるように、「痛み」をエタミと発音する人もいます。このようにナイとエの混同、交替は東北地方から北陸にかけて広く見られる現象です。

次回も形容語の方言を続けます。

連載
140

形容語の方言あれこれ
その3



「あら、かわいらしい〜。将来はキリョーヨシやね」
「えへへ、キリョーヨシってな〜に?」(安宅町の北村芽衣ちゃん)

今回も前号、前々号に続いて形容語の方言を見ていきます。

1 容貌に関する形容語の方言キリョーガ

「美しい」こと、「美人な」ことをキリョーガイーと言います。漢字を当てれば「器量がいい」です。キリョーガイーも前々号で紹介した「元氣な」の意味のソク

サイナ(息災な)、タツシヤナ(達者な)と同じように、共通語として今も使われますが、やや古めかしい言い方に属するものであり、それが小松では高年層の方言として普通に使われているところに注目したいと思います。

「醜い」の意味のメンデは「面倒い」から

「美しい」の反対の意味の形容語「醜い」にあたる方言には、キリョーガイーの反対の言い方であるキリョーガワルイ器量が悪い)のほかに、メンデ、メンデー、メンダイ、メンデクサイなどの言い方が聞かれます。メンデ、メンダイなどの言い方は「面倒」の語が形容詞化したメンダイに由来するものと考えられ、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「めんどう」の形で、①「めんどうだ。めんどうくさい」、②「困難だ。難しい」、③「気難しい。意地悪い」、④「恥ずかしい」、⑤「じれったい。もどかしい」、⑥「騒がしい。やかましい」、⑦「醜い。見苦しい。体裁が悪い」など、さまざまな意味で使われていることが分かります。小松のメンデの類は⑦の意味に

あたる例といつことになるでしょう。『日本方言大辞典』では⑦の意味のメンダイの分布地域として、石川県、福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、愛媛県、高知県が載っており、そこには、小松市内で聞かれたメンダイも石川県能美郡の例として載っています。メンダイ(面倒い)が元の形と考えれば、メンダイがそれにより近い古い形で、メンダイの「ダイ」の「e」の部分が融合・長音化して「ai」となったのがメンデー、さらに最後の長音部分が落ちた形がメンデと考えられます。関連して、「美人ではないけれどもかわいい」人を指すメンドガワイラシーという言い方も聞きました。

「みすばらしい」様子を言うヒンソナ(「貧相な」から)、ピンボタラシー、ピンボクサイ、「みっともない」「不潔な、汚い」様子を言うヤンチャクサイ、ヤンチャナも聞きました。
次回もさらに形容語の方言を続けま

連載
141

形容語の方言あれこれ
その4



「図書館に来たら、オトナシーガニハナサンナンヨ」
(芦田町の民谷英祐くん)

今回はまず前回取り上げたメンデについての補足から始めます。

小松にもメンダイがあった

前回は、「醜い」の意味の方言として小松で聞かれるメンデ、メンデー、メンダイなどは、「面倒」が形容詞化したメンダイに由来するものだろうと書きましたが、これまでの小松での調査資料を詳しく見

ていましたら、符津での記録に「顔形が醜い」の意味のメンダイ、「器量が悪い、体裁がよくない、みっともない」の意味のメンデクサイがありました。これで、メンデ、メンデーなどが「面倒い」が元の形であることが証明されたと思います。

ちなみに、「めんどう」の「面倒」の字は借字で、そもそも語源は「まつすること」がむだだの意の雅語「だうな」に「目」を冠した「目だうな」の変化。原義は「見るのも大儀な」の意(『新明解国語辞典 第六版』三省堂)とありますから、「醜い」もその原義から派生したものと考えればいいでしょう。

メンダイ、メンデとメンダナは別語?

メンダイ、メンデなどに触れたついでにメンダナという方言も取り上げておきましょう。こちらにも漢字を使って書けば「面倒な」で、語源は先の「目だうな」に同じでしょうが、メンダナ(口)と言えば醜い(子)ではなく「厄介な(子)」の意味になります。語源はもともと同じなのに、形や意味が微妙に変化し、メンダイ、メンデ

という形容詞形とメンダナという形容動詞形の二つが小松では併用されていることになりました。

オトナシーも共通語とは異なる意味が

オトナシーと聞けば、最近では共通語的な「大人しい」の意味を思い浮かべる人がほとんどかもしれませんが、小松では「静かな」の意味で使われることもあります。「静かな」の意味で使うという高年層の人の中には、オトナシーは「音無し」で「静かな」の意味になると思っている人がいますが、それが本当なら、こちらは「大人しい」(本来「いかにも大人らしい。大人びている」年配で分別がある「穏和だ。穏やかだ。すなおだ」などの意味)と「音無し」という別語に由来するオトナシーが併用されていることになり、音が「音無し」は民間語源(正しい語源ではないが民衆が自分の使う語を合理化するために生まれた語源)と考えるべきでしょう。